

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

専門性と社会を関連させた

体験型学習を行う学部〈東日本編〉

当コーナーでは、2010年9月号、11年4、10月号で、体験型学習をカリキュラムの中心に据え、学生の意欲の向上を図る大学・学部を紹介してきた。こうした取り組みは、理工系、経済・経営系以外の学問分野にも広がりをを見せている。4、6月号連続で紹介する。

体験を通して「キャリア」を 学び、視野を広げる

法政大
キャリアデザイン学部

◎課題意識と狙い

法政大キャリアデザイン学部は、2003年度に開設された。聞き慣れない学部名だが、教育学、経営学、人文社会学などの複数の領域を扱い、「幅広い学びの中から興味のあることを見付けられる」と学生に好評だ。

荒川裕子教授は、「キャリアデザイン」といっても職業だけを考える

学部ではありません。『ワークキャリア』と『ライフキャリア』の両方

を考える、つまり生き方全体を考える学部です」と語る。

同学部では、学ぶことや働くこと、生活などを考える際に、机上の学問だけではなく、学生自身が出た「学ぶ体験」や「働く体験」を重ねることが重要と考え、体験型学習をカリキュラムの中心に据えている。更に、自分のキャリア形成だけではなく、他者のキャリア形成を支援できるスキルを身に付けることも、学習目的の1つとしている。

◎取り組み内容

体験型学習の中心となる科目は、夏期休業中に企業やNPOなどで仕事を体験する「キャリア体験学習」と、学校や地域で他者の学びを支援する「キャリアサポート実習」だ。組織の一員としての立場と、リーダーとしての立場の両方を体験することが出来る。2年次からの選択必修科目（*）だ。

「キャリア体験学習」には、企業と連携して新商品を開発するコースや、自分で実習先を探すコースなど6クラスがある。「キャリア体験学習」を担当する小門裕幸教授

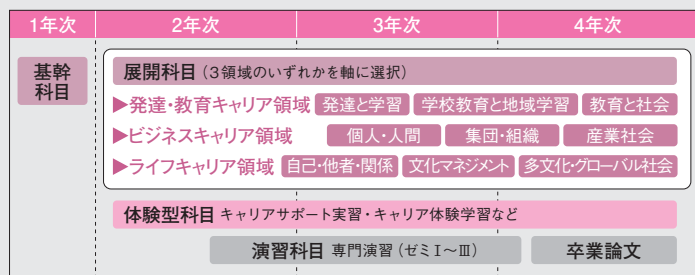
は次のように話す。

「キャリア体験学習は、1クラス25人程で行います。2年次前期に事前指導を行い、後期に働くということについて考察を深めます。学生は、実習先の企業や自治体の方に叱られて落ち込むこともあり、失敗もします。そうした中で、どうすれば相手の役に立つのか、自分で考えるように指導しています」

この2科目を軸として、1年次の基礎ゼミ、2年次の体験型学習、2年次後期から4年次まで続くゼミ、卒業論文と、4年間にわたつ

*カリキュラム変更のため、2011年度までは1年次で履修、12年度から2年次での履修となる

図1 法政大キャリアデザイン学部 カリキュラム体系



2年次以降、講義型の専門科目で体系的な学びを積み上げると同時に、学外での実習を重視した体験科目を通じて、社会を経験させ、スキル養成も行う

*学校資料を基に編集部で作成

て体系的に学びを深められるようにカリキュラムが組まれている(図1)。2年次後期はゼミと体験型学習が同時進行となり、学生にとってハードなカリキュラムである。「課題を出し、学生が主体的に行動せざるを得ない環境にしています。社会のどこかにコミットして自分の役割を果たすにはどうすればよいか、気付かせるのです。そのためには外の世界を体験することが重要

です」(荒川教授)

他に、特別プログラム「キャリア体験学習(国際)」では、中国やベトナムを訪れ、日系企業の現場を体験し、現地大学生と交流する。また、小門教授が担当する「事業創造論」では、1クラス20～30人の学生がチームに分かれてビジネスプランを作成し、学内のビジネスコンテストに応募する。コンテストで優勝するチームが過去にいくつもあるほど、鍛え上げられるという。

こうした体験型学習の効果をより高めるためのサポート役として、キャリアアドバイザーの存在がある。キャリアアドバイザーは教員と学生をつなぐ立場と位置付けられており、6人が在籍。学生の学習支援や進路選択のサポートの他、学生一人ひとりと面談を行い、丁寧にアドバイスする。キャリアに関する資料をそろえた「キャリア情報ルーム」には、体験型学習などを進めるに当たって自由に使えるスペースがあり、学生の学びを助けている。

◎成果と課題

小門教授は、「体験型学習というきっかけを与え、視野を広げること

で、学生が精神的に強くなっていると感じています。まだ自立できていない学生には、巣立ちのプロセスが必要です。外の世界を体験させ、自分で責任を取れる、自立した人間の育成を目指しています」と語る。

2年生の藤原優紀[®]さんは、「私は元々積極的な性格ではなく、実習に参加するのは少し嫌だなと思っていました。でも、頑張って参加してみました。将来の職業を考えるきっかけがつかむことが出来ました。自分を追い込むことで、苦手なことにも挑戦できたと思います」と語る。

今後も、カリキュラムのさまざまな場面で、学びを通した学生への動機付けを行っていくという。同学部のキャリアアドバイザーである服部典子氏は次のように語る。

「就職活動の前になると、『自分には専門性がない』と不安になって相談に来る学生がいます。そこで考えてほしいのは、就職活動のためではなく、学びのための自己分析です。私たちは、『人のエキスパート』『人と接することのプロ』を育てています。他人に貢献でき、更に自分もマネジメントできる人になってほしい。

い。そのためにどうしたらよいのか、自分で考え、行動するようアドバイスしています」

社会との接続を意識した体験型の「スタジオ式教育」

横浜国立大学
教育人間科学部人間文化課程

◎課題意識と狙い

横浜国立大学教育人間科学部人間文化課程は、11年4月、それまでのマルチメディア文化課程と国際共生社会課程を統合・再編して新たに誕生した。再編前は、ゼミが専門教育の中心であり、教員の下で文献を読み、論文を書くというスタイルの教育も多かったが、再編後は、体験型学習である「スタジオ式教育」を強く打ち出し、学生に学問と社会との接続を意識させ、学問研究だけでなく、課題解決能力、企画立案や運営なども出来る人材の輩出を目指す。スタジオ式教育は、教員と学生が協働して課題を設定し、横浜市や川崎市など学外に出て、さまざまな職業の人や子どもたちに対する取材やワークショップなどを重ねながら、プロダクトやイベントといった形で

*プロフィールは2012年3月時点のものです

社会への発信を図るといふものだ。11年度は12のスタジオが開講された(図2)。映像や音楽の作品作り、ドキュメンタリーの制作、フィールドワーク、国内外での研修など、現場に実際に出て、学外の人々とも交流する。

「未来構想スタジオ」を担当する大須賀史和准教授は、「再編前にも、ワークショップ型、プロジェクト型の科目を用意し、体験型学習を行っていました。一部の学生しか履修していませんでした。元々、学習効果は高いと考えていた体験型学習を、『スタジオ式教育』として体系化し、必修科目とすることで、全ての学生に、より質の高い教育を提供しようと考えました」と語る。

◎取り組み内容

スタジオ式教育は、「スタジオI(入門)」から「スタジオV(創造的実践)」の5科目から成り、1年次後期から3年次後期まで半期単位で進む。元々、同課程には1年次前期に必修科目である「基礎演習」があるが、後期にそれにつながるプログラムがなく、2年次から始まる専門教育への接続が上手く出来ないとい

う課題があった。

「鉄は熱いうちに打て、ということとです。1年次後期が半年間の空白期間で、学生のモチベーションが下がり、学習への意欲を失いがちでした。そこで、1年次後期から始まるスタジオ式教育で、体験型学習を基に専門性を付けようと考えました」(大須賀准教授)

1つのスタジオに付き2～3人の教員が指導する形態のものも多い。その場合は、複数の教員が同時に教えたり、週によって交代したりするなど、スタジオの特色に沿って工夫しながら授業は進められる。大須賀准教授が担当する「未来構想スタジオ」では、哲学や思想を学ぶが、抽象的な議論に陥らないようにマインドマップを使ったブレインストーミングをしたり、市役所に勤務する卒業生の講演を聞いたりするなど、体験型学習を重視している。

于臣准教授は東アジアの歴史と現在を学ぶ「イースト・アジアン・スタディ・スタジオ」を指導している。「スタジオに所属する学生は、上海の華東師範大に行き、1週間の研修(日本を伝えるプレゼンテーショ

ンなど)をし、現地の学生と交流もします。経済成長のみならず、格差も見られる、等身大の中国を見せつつ、歴史や思想を理解するきっかけをつくりたいと考えています」

スタジオは学期ごとに変えてもよく、最大で5つのスタジオに所属が可能だ。ただし、自分の関心に合わせて1つのスタジオを選んでほしいと、大須賀准教授は語る。スタジオ式教育では、専門分野の学びを深めることはもちろん、先輩・後輩の交流が生まれることも意図しているからだ。1年次～3年次の実践中心のスタジオと、3年次からの専門を深めるためのゼミは、同じ教員のものを継続して履修し、理論と実践で専門を深めてもらうのが理想だという。

◎成果と課題

スタジオ式教育では、1つのスタジオに複数の教員が関与するため、教員同士が刺激を受け合い、学生も先輩・後輩間で刺激を受け合う。ゼミは学年ごとの活動が主体であるのに比べ、スタジオ式教育では「タテ、ヨコ、ナナメ」の幅広い人間関係が生まれ、多様な学びの機会が得られるという効果も期待できる。

図2 横浜国立大学教育人間科学部人間文化課程「スタジオ式教育」

2011年度の開講スタジオ

- | | |
|--------------------------|----------------|
| ・アーバンアート・スタジオ | ・未来構想スタジオ |
| ・音楽・音響スタジオ | ・国際都市・横浜発見スタジオ |
| ・映画・映像スタジオ | ・ツーリズム・スタジオ |
| ・編集・批評スタジオ | ・知識社会学スタジオ |
| ・イースト・アジアン・スタ
ディ・スタジオ | ・都市生活デザイン・スタジオ |
| ・現代史ドキュメント・スタジオ | ・国際社会学スタジオ |

2011年度は12のスタジオが開講した。各スタジオの定員は1学年当たり10～15人。2012年度以降は学年横断での活動も予定している

「イースト・アジアン・スタディ・スタジオ」に所属する1年生の今中愛海さんは、「中国語に興味があり、このスタジオを選びました。中国や韓国の映画などを見て、映画が製作された背景をグループごとに調べてプレゼンテーションや議論をするなど、聴くだけの講義とは違った面白さがあります。授業時間外にも友達ちと集まり、発表の準備をしています。忙しく大変ですが、やりがいを感じています」と語る。

課題として、スタジオ設備の充実

行政について学び、 故郷の復興に生かしたい



法政大
キャリアデザイン学部2年
伏見啓直
(福島県立原町高校卒業)

大学に入り将来を模索している最中に、東日本大震災で故郷・福島は大きな被害を受けました。故郷は、原発事故終息後に戻りたい高齢者と集団移転したい若い世代との間で揺れています。地域行政のあり方がより重要になっている——そう感じていた頃、私は学部の「体験学習」で長野県飯田市で行われたフィールドスタディーに参加しました。

飯田市は地域おこしが活発で、私たちは地域の祭りに参加し、住民にインタビューなどをして政策提言をまとめました。具体的には、観光客への農業体験の提供やセカンドキャリアとしてゆったり暮らせるような地域づくりなどです。飯田市は、住民の声を市政に生かすため、公民館をたくさん作り、若い市職員が勤務し、住民自治を市政の意思決定に生かしていることを知りました。

「体験学習」で学んだ経験から、もっと政治学をアカデミックに勉強し、実践していききたいという気持ちが強くなっています。

1年間の中国留学で 広い世界を体験したい



横浜国立大学教育人間科学部
人間文化課程1年
堀田仁紀奈
(熊本県立熊本高校卒業)

いずれは海外留学したいと思い、国際的な学びが出来るような本学を選びました。留学生が多く、協定校も多いことや、留学中の単位が認定されることも魅力でした。こうした関心もあって、経済史や思想史、比較文化などを学ぶ「イースト・アジアン・スタディ・スタジオ」を選びました。

授業では、日中間の古紙のリサイクルや、日本の金型職人が中国に人材流出するなどの、アジア各国のドキュメンタリー番組などを見て、6人のグループで、その背景を調べ、発表しました。こうした授業は、座学中心の講義に比べて忙しいですが、充実しています。また、完成度の高い発表を聴く度に刺激を受けています。高校までは自分から調べて発表するような機会はほとんど無かったからです。自分でテーマを掘り下げるだけでなく、自分で発信する力の必要性も感じました。

12年9月から上海交通大に1年間留学する予定です。日本人の中国に対するイメージを変えるような、更に深い学びを中国で体験したいと思います。

が挙げられる。各スタジオは共用のパソコンルームや資料室などを徐々に整えている段階であり、学生が自主的に活動できる部屋の確保はまだ準備中だ。カリキュラム編成と同時に、活動できる場がどのように整備されていくかが注目される。

進路指導に生かす

専門分野と社会との関係を 関連させているか

2つの事例で共通しているのは、2年次から体系的に専門分野と社会との関係性を意識させるカリキュラムを組むことで、より深い学びへとつなげようという意図である。また、体験型学習を経験する過程で、社会体験や調査、アウトプットのためのスキルを養成する狙いもある。

今回紹介したように、プログラムが単年度ではなく、4年間で体系的に組まれている点や、体験型学習が社会との接点だけでなく、専門分野を深めることにもつながっている点などにも着目したい。座学だけでは得られない学びの有無が、これからの大学選びのキーワードだろう。

取材・編集協力：山内太地

事例以外に体験型学習を行う大学・学部を紹介

体験型学習を行う大学 東日本編

●首都大東京

グローバル・シチズンシップ・プログラム(GCPS)

学部1・2年生を対象に、英語による授業を行う科目、国際活動力強化科目、プロジェクトワークなど幅広い学びを通じて、世界で活動できる人材の育成を目的としたプログラムがある。

●創価大経済学部 社会貢献と経済学

80人規模の授業でアクティブラーニングを実施、1つのテーマを基に学生同士での議論や、社会人になった先輩や企業人に来てもらって話をするなどし、経済学の社会での有用性を具体的な事例を通して学ぶ。

●東京電機大情報環境学部 プロジェクト科目

「プロジェクト科目」を特色ある教育として打ち出している。教員、企業・官公庁から募集されたテーマに学生が取り組む。学生自身がテーマを出すことも可能。

●日本大生産工学部 生産実習

大学で学んでいる知識が社会でどのように利用されているかを、企業や公的機関などにおける実習体験から学び取り、総合的知見に富んだ技術者を育てることを目標にしている科目。